

書評

Christine Hélot, Raymonde Sneddon and Nicola Daly (eds.) (2014) *Children's Literature in Multilingual Classrooms: From Multiliteracy to Multimodality*, Trentham Books Ltd, 171p.

大山万容

異言語話者の子どもに対しては伝統的に、「子どもが支配言語を学習するには、支配言語のみにさらすことが最も効率的である」という信念がある。一方で、マルチリンガルの子どものために、教室で複数の言語の使用を禁じられることは、アイデンティティの深刻な抑圧となる。子どもが自分の言語を十分に価値づけられないとき、学校での学習に負の影響をもたらすことは、ジム・カミンズの一連の研究によって知られている。

移民は多くの場合、最終的にホスト国に統合されるか、ホスト国の多数派から分離して民族コミュニティの中に閉じこもるか、その2つの選択に集約される。異言語話者の子どもをホスト社会に統合することを選択し、しかも母語や継承語を価値づけるのであれば、学校の言語教育実践に、「通常のクラスの中で」、子どもが持っている複数の言語を用いて、複合的なリテラシーを発達させることが要求される。つまり完全にモノリンガルだった教室を、マルチリテラシーの学びの場に変えるのである。とはいえ、そんなことが本当にできるのだろうか。

本書は、2011年にオスロで開かれた研究集会の報告論集で、様々な研究理論に依拠する複数の研究者・教育者が、まさに「普通のクラスをマルチリテラシーの教育の場に」する実践を行い、それに基づいて行った研究を集めたものである。実践の行われた国はイギリス、カナダ、フランス、ニュージーランド（以下NZ）、フィンランド、スペインそしてオーストラリアである。いずれの国も、人口における移民の割合は日本よりもずっと高いが、言語政策として国や地域が推進するバイリンガル教育を除くと、学校教育には一般にモノリンガルの伝統が強く、そこで複言語能力を発達させるには実践者や研究者による多くの工夫が必要である。

教室をマルチリテラシーの学習の場に変えるために、本書の著者たちが注目するのは、翻訳児童書の利用である。筆頭編集者のクリスティーヌ・エローは、言語教育における

翻訳書の使用について長く研究してきており、とりわけ児童文学書における文化の翻訳について鋭い批判を行ってきた。エラーによれば、翻訳書の中には読者の読解力を過小評価し、文化本質主義的な翻訳に陥るものも存在する。一方で翻訳書は使い方を工夫すれば非常に有効な複言語教育のツールとなりうる。本書はそのような事例を集めたものである。しかも、既にある翻訳書を学習のために用いる（第1～4章）だけでなく、子ども自身が本の翻訳者/作者/作家となるという実践（第5～7章）までをカバーしている点が新しい。

González Daviesによる第1章“The changing role of translators in a bilingual context: Catalan (in) visibility and the translation of children’s literature”は、児童書のカタルーニャ語への翻訳について通時的な検討を行っている。これにより、翻訳が決して透明な作業ではなく翻訳者の言語的、社会的、歴史的な背景を映し出すこと、それが読者である子どもにどのような影響を与えるかを明らかにしている。著者は、教材として翻訳書を使用するときには、ただテキストを読むだけでなく、子どもに翻訳の特徴や背景を調べさせる意義を説く。

Dalyによる第2章“Windows between worlds: Loanwords in New Zealand children’s picture books as an interface between two cultures”は、マオリ語のプレゼンスを高める言語政策を採るNZでの、マオリ語の借用語についての研究である。著者は1995年から2005年までの間にNZで出版された英語の絵本の中に、マオリ語からの借用語がどれだけあるかを調べ、絵本を分析し、その絵本を使うことで子どもがどのように変わったかについて親へのインタビューを行っている。また著者は翻訳者にもインタビューを行っており、マオリ語からの借用語を使うのか、マオリ語から英語に翻訳した単語を使うのかという選択について議論を行っている。

Sugranyes ErnestとGonzález Daviesによる第3章“Translating heritage languages: Promoting intercultural and plurilingual competences through children’s literature”は、カタルーニャでニューカマーの児童に対して行われた、英語の授業実践を紹介する。ここではニューカマーの子どもが持つ言語を、継承語と位置づけている。実践は次のように進む。(1) 教師が児童に、難易度の低い英語の物語を読み聞かせる。児童は、(2) 用意されたフォーマットから、自分で英語の絵本を作り、(3) 他の児童と協力して、自分で作った英語の絵本を自分の継承語に翻訳し、(4) 自分の作品の読みを練習し、(5) 下の学年の子どもに英語と継承語の両方で絵本を読み聞かせる。実践の前後には異文化間能力の評価や態度と動機付けの評価、学力試験が行われる。本章は、子ども自身が翻訳に取り組むことが、異文化間・複言語能力の発展に寄与すること、児童書の中に継承語

を可視化させることが、弱い言語に存在感を与え、言語意識や文化意識をはぐくむ学習活動になると論じている。

Lysterによる第4章“Children’s literature as a catalyst for dual language awareness”は、カナダで行われているフランス語と英語のバイリンガル教育において、翻訳を用いる実践である。まったく同じ物語について、オリジナルと翻訳版を用意し、2つの言語で比較しながら学ぶことで、学習者は2つの言語のつながりを意識しやすくなり、これが派生語の知識の伸長や、バイリンガリズムへの動機付けや言語の成長に結びつくと、著者は論じている。

Lotheringtonによる第5章“DIY plurilingual literature: A multimodal approach to linguistic inclusion in the urban elementary classroom”は、極度の多様性に特徴づけられるカナダ都市部の小学校において、子ども自身が物語作りを行う実践を報告する。学校教育は紙とペンといった伝統的なメディアにこだわる傾向があるが、電子メディアなどの新しいメディアは子どもの生活環境の中に自然に存在しており、しかもそれらには、マルチリンガルの子どもの複数の言語を組み合わせやすいという大きな利点がある。この実践では、こうしたマルチメディアを使い、文字と絵だけでなく、インターネットなどを通じて得られる動画や写真、音声、アニメ、音楽など、異なる様式を組み合わせたマルチモードの作品作りを行っている。親やコミュニティの人々もこの実践に参加し(これを著者は「クラウド・ソーシング」と表現する)、子どもごとに「カスタマイズ」された物語製作を行う。複数の言語だけでなく、複数のメディアを言語教育に含めることの重要性を示した論考である。

Ollerによる第6章“Interweaving cultures through bilingual fairytales: A communitarian programme linking family and school literacy practices”は、カタルーニャで行われている“Interweaving Cultures Project”という実践を紹介する。これは、幼い子どもを持つアフリカ出身移民の女性を対象に、図書館で、その女性の母語とカタルーニャ語との2つの言語で物語を作る学習プロジェクトである。こうして母語の可視化と母語を使うことへのエンパワーメントを経ると、母親のカタルーニャ語能力が大きく伸長し、子どもにも母語を維持しようとする動機付け、さらに図書館が多言語の交流の場になるといった効果が現れる。著者は、こうしたエンパワーメントの実践を学校の中に根付かせるための考察と、現実的な提言を行っている。

Sneddonによる第7章“Reading and making books in two languages”では、児童の8割がバイリンガルで、30以上の言語が話されているロンドンの小学校での実践を報告する。この実践では、2つの言語で本を読める子どもを対象に、子ども自身が母語と英

語の翻訳を行う。子どもが複数の言語を使って物語を作り、本という形にしていくことが、学習への強力な動機付けにつながることを描き出している。

第8章は Pitkänen-Huhta と Pietikäinen による “From a school task to a community effort: Children as authors of multilingual picture books in an endangered language context” という論考である。“Little book”とはヨーロッパで実践されている教授法の1つで、子ども自身が、自分で好きな言語を選んで、自分で物語を作るものである。これは20世紀前半に活躍したフランスの教育者セレスタン・フレネの教育理念に基づくもので、子どもたちが自分たちで好きな絵本を作ることを基調とする。

フィンランドの“Little Book”は主として危機言語であるサーミ諸語の価値を承認するために行われている。サーミ諸語にはいろいろな言語が含まれていて、その中からどれを選ぶかは子どもにゆだねられている。その言語選択の過程も興味深い。ここではまず、クラスにいるサーミ語を継承語とする子どもの持つ、2種類のサーミ語で本を作り、そこに、さらに他のサーミ語を反映させていく。追加する言語は子どもが選び、コミュニティから翻訳を手伝える人を探してきて、本作りに協力してもらう。このようにして学校の課題にコミュニティの力を巻き込んでいくのだ。子どもたちのサーミ語知識はごく限られたもので、この点では日本の言語的少数派の実情に近い。言語的資源が非常に少ないように見えても、マルチリテラシー教育ができることを示している点で、この論考は興味深い。

Schreger と Pernes による第9章は、“The big world of Little Books”と題された、オーストリアの実践を報告する。子どもたちが協働して、教室の内外で作る“Little Books”は、オーストリアでは様々な言語で既に500冊以上が出ている。子どもが自分の複言語レパートリーの中から好きな言語を選んで作るもので、使用する言語は特に指示されない。この事例では選ぶ言語は一つでも、複数でもよい。教師の志向はえてして子どもに伝染するものだが、それでも教師はなるべく自分にとって「エキゾチック」なものを選ぶよう仕向けないように、子どもが自分の日常生活の中から言語を選べるように努力する。

内容は自由であるため、心理的なテーマが出てくることもある。たとえば Ayshat という少女による “Der verbotene Vogel” すなわち「(歌うことを) 禁じられた鳥」と題されたドイツ語の物語では、弓矢を背負った黄緑色と赤色をした鳥の絵が描かれ、ページをめくるごとに、禁じられた鳥は次々に他の禁じられた鳥を殺していき、最後には全ての鳥がいなくなってしまう。この物語は特に予告もなく書かれ、作者は内容については一切コメントしなかったという。Ayshatの絵は本書の表紙に使われているが、それはここから、抑圧された言語・文化的アイデンティティの苦悩を読み取ることもできる

からであろう。

本書全体を通して、(1) 翻訳書の使用により、教室での言語教育実践の中でマルチリテラシーを学べること、そして(2) ひとたび複数言語を使って表現する手段を与えられれば、異言語話者は子どもであっても、マルチリテラシーによるナラティブの主体となれる、ということが描き出される。同時に、そのような機会を学校システムが組織的に奪っていることへの懸念も散見される。しかし研究者が行うべきなのは学校をただ批判することではなく、今まさに何が有効であるかを、データをもって示すことなのだ。本書の序章を記したカミンズは、次の3つの主張が、本書で得られたデータと矛盾せず、一貫した説明を提供すると解説している。

- 1) バイリンガル学習者の家庭言語を通常クラスで承認し、促進することが言語間の転移を支え、言語意識と言語使用を高める。
- 2) リテラシーに参入することがリテラシーの習得を促進する。
- 3) アイデンティティを承認することが学習への参入に必須である。

本書は、マルチリンガル研究と、学校の言語教育実践とをつなぐ実践と知見を豊富に示すものであり、言語教育の研究者や実践者、学校の教師が、子どもの持つ複数の言語や文化を活かし、発展させるための授業実践デザインを考える力強い味方となるだろう。

(京都大学)